

[Activity Report]

A report on the 57th annual meeting of the Japan Society for Oriental Medicine

Toshifumi Tanaka*, **

* Aino Gakuin College

** Aino Institute for Aging Research

Abstract

The 57th annual meeting of the Japan Society for Oriental Medicine was held from the 23rd to the 25th of June 2006 at Osaka International Convention Center. As a member of Aino Gakuin College, which hosted the meeting, I report on the program and the theme in detail. Special mention is given to the participation of Aino Gakuin College students in the meeting management, which was very helpful to the secretariat. It also served educational purposes and proved to offer a good experience to the students.

Key words : The Japan Society for Oriental Medicine, student volunteers

第 57 回日本東洋医学会学術総会を主催して

田 中 俊 典*

【要 旨】 2006（平成 18）年 6 月 23 日から 25 日までの三日間、藍野学院短期大学学長・藍野加齢医学研究所所長の大澤仲昭先生の会頭のもと、「21 世紀の日本の東洋医学の進路——伝統の継承と新しい発展」をテーマに、第 57 回日本東洋医学会学術総会が大阪中之島の大阪国際会議場に於いて開催された。近年重要視されつつある東洋医学の学術総会を藍野学院で主催したことは大変意義深いことであったと考える。また本学術総会ではプログラムの内容から運営にいたるまで、新しい試みが多く取り入れられた。なかでも藍野学院短期大学学生の総会運営への参加は画期的なことであり、非常に評価が高かったと同時に、学生たちにとっても良い経験であった。

キーワード：日本東洋医学会、学生ボランティア

I. は じ め に

2006（平成 18）年 6 月 23 日から 25 日までの三日間、藍野学院短期大学学長・藍野加齢医学研究所所長の大澤仲昭先生の会頭のもと、第 57 回日本東洋医学会学術総会が、大阪中之島の大阪国際会議場（グランキューブ大阪）に於いて開催された。テーマは「21 世紀の日本の東洋医学の進路——伝統の継承と新しい発展」である。

社団法人日本東洋医学会は日本医学会加盟学会中、唯一の東洋医学を専攻する学会である。設立は 1950（昭和 25）年で、会員は 2006（平成 18）年現在およそ 8,500 人。その多くが医師であるが、薬剤師や鍼灸師の会員が 1 割ほどを占めている。学術総会は年 1 回開催され、各支部が持ち回りで主催する。ちなみに 2005（平成 17）年は富山で行われ、2007（平成 19）年は広島での開催が予定されている。

本学術総会は梅雨のさなかのうっとうしい天候にも

かわらず、予想以上に多数の方々に参加され、プログラムから運営にいたるまで高い評価をいただいた。なかでも藍野学院短期大学の特色を生かした学生の学会運営への参加は、今までにない試みであったが、来場された方々からは非常に喜ばれた。一方で学生にとっても学術的な現場の雰囲気を感じ取る貴重な経験であったと同時に、来場者の接遇や、現場で発生する数々の問題に臨機応変に対応したりすることもまた価値のある体験であったと考える。そこで本学術総会を総括するとともに、この辺りの状況を若干の感想を交えて報告したいと思う。

II. 概 観

学術総会の参加者数はここ数年 1,700 ～ 2,600 人の間で推移している。今回の参加者数は全体で 2,664 人であった。そのうち非会員の方が 518 人、中でも学生が 90 人と例年に比べ非常に増えているのが特徴的で

* 藍野学院短期大学・藍野加齢医学研究所

あった。主催者が用意した特別演題は35題あり、その他にサテライトシンポジウムやランチョンセミナー、市民公開講座などが同時に催された。全国から募集した一般演題は250題であった。使用した会場は9会場であった。

Ⅲ. テーマについて

上でも触れたが、本学術総会のテーマは「21世紀の日本の東洋医学の進路——伝統の継承と新しい発展」である(図1)。日本では20世紀後半に漢方薬を簡単に処方できるようになって、漢方は急速に普及した。現在では80%以上の医師が漢方薬を処方した経験を持つと言われている。しかしながら医療体系とし

プログラム 有益で楽しめる総会

会頭講演 「日本漢方の伝統を守る」
大澤 伸昭 (藍野学院短期大学学長)

招待講演 「サムシンググレート——漢方と遺伝子の研究から」
村上 和雄 (筑波大学名誉教授)

特別講演 1. 「プロテオミクスと東洋医学——最先端医学からみる東洋医学の神髄——」
丸山 征郎 (鹿児島大学教授)
2. 「21世紀の高齢者医療に統合医療の導入を」
折茂 一彦 (健康科学大学学長)
3. 「COEプログラム——東洋の知に立脚した個の医療の創生への成果」
寺澤 達年 (千葉大学教授)

日本東洋医学会学術賞受賞講演 「漢方臨床研究の展望」
花井 昌彦 (北里研究所東洋医学総合研究所所長)

教育講演 1. 学術総会(57)基礎漢方講座
① ウェルカム講座：漢方を楽しむための心
② 漢方医学の歴史：臨床医が漢方医学の歴史をふまえることは？
③ 漢方医学の病態のとなえかた
④ 漢方臨床における鍼灸医学
⑤ 漢方臨床における漢方薬理の理解
⑥ 中医学理論・中医学の理論体系、治療の実際
⑦ 漢方診断学講座とその1> 望診：「舌診」
⑧ 漢方診断学講座とその2> 切診：「脈診・腹診」
⑨ 私の漢方医学の習得：漢方の魅力にとりつかれた外科医の歩み
⑩ 私の漢方医学の発展：古典的な漢方のとなえ方、新しい証の捉え方
⑪ 漢方医学と西洋医学の統合をめぐって
⑫ フェアウェル講座：「漢方医学への感謝と希望」
⑬ 漢方医学教育からみた本シリーズの意義

教育講演 2. 「日本漢方諸学派のなごり」
安井 廣通 (安井医院)

教育講演 3. 「明治維新の際、日本の医療体制に何がおこったか——西洋医学選択の道のり——」
吉良 枝郎 (順天堂大学名誉教授)

第19回伝統医学臨床セミナー
「随証治療の神髄を探る」

特別シンポジウム
「21世紀の日本の東洋医学の進路を探る」

シンポジウム
1. 「メタボリックシンドロームの治療における漢方の有用性」
2. 「病名治療でできる漢方、随証治療だからできる漢方」
3. 「古典に学ぶ：金匱要略」
4. 「漢方のEBMはどうあるべきか」
5. 「国際化に向けての漢方治療の最前線」

ワークショップ
1. 「アトピー性皮膚炎の治療におけるステロイド療法と漢方療法的位置づけ」
2. 「病院医療における鍼灸——現代における鍼灸の役割を考える——」
3. 「生薬から漢方を考える」

ラウンドテーブルディスカッション [午前・午後2部制]
*EBM委員会との合同企画
「劇的に効いた漢方の経験(20症例)——ベストケースをエビデンスとするために」

先進に学ぶセミナー
総野 八郎 (総野診療所)
山田 光典 (金匱会診療所)

市民公開講座 「漢方でいきいきと美しく」

ランチョンセミナー
学生展示企画
「各大学におけるクラブ活動の紹介」

会頭 大澤伸昭(藍野加齢医学研究所所長・藍野学院短期大学学長)
会期 平成18年6月23日(金)～25日(日)
会場 大阪国際会議場(グランシーブ大阪)

〒557-8505 大阪府大阪市東淀川区2-2-25 藍野加齢医学研究所内 TEL/FAX 072-621-9746
〒557-8505 大阪府大阪市東淀川区2-2-25 ハービスENT 1階4階ラウンジ コンベンション事務局内
TEL 06-6507-9691 FAX 06-6507-9695 E-MAIL 67toy@jtscom.co.jp
http://67toy.jtscom.co.jp/

図1 本学術総会のポスター
二本の曲線はそれぞれ東洋医学と西洋医学を表し、その合流点には、明治文明開化の頃の中之島を様子を書いた錦絵が配され、総会のテーマを象徴的に表現している

ての東洋医学はいまだ医療の現場に定着したとはいえない。漢方薬を処方するといっても、ほとんどの場合単に一種の医薬品として使用するにすぎないのである。一方で、近年の社会状況の変化や疾患の質的变化にしたがって西洋医学の弱点が指摘されるようになってきた。それに伴い漢方薬のみならず東洋医学の考え方、つまり西洋医学のそれのごとく疾患の治療に力点を置くのではなく、患者全体を見て患者を治療するという考え方、対しても大きな期待が寄せられてきている。このような状況の中で開催される学術総会にとっては、東洋医学の正しい知識を広め、定着させることこそが使命であるといえる。すなわち東洋医学の神髄を誤り無く伝え広めること、このことを21世紀の進路としたのがこのテーマである。この辺りのことは大澤先生が別の機会に述べられているので引用したい。

「……しかし、ただ西洋医学に定着させるということだけでは、漢方そのものの存在意義が薄れてしまう危険があります。つまり漢方は西洋医学の疾患治療の一選択肢に過ぎないということになってしまいかねません。日本で医療を行う以上、これもある意味でしかたがないとも言えますが、しかし、漢方は西洋医学とまったく異なる病理観や診断体系をもっていますから、これらを日本の医療界に伝えていかなければなりません。私はこの重要な仕事を“伝統の継承”という言葉で表現してみました」(ツムラ漢方スクエア メールマガジン第20号2006年5月10日発行より)

以上のような文脈で学術総会を位置づけてみると、「教育」ということがキーになるというのは、至極当然のことである。実際プログラムの内容を見ても、教育に重点が置かれており、その結果の一つが、学生の参加者数の増加に現れていると考えられる。一方で教育とは受ける側にとってみれば「有益で役に立つ」ということでもある。本学術総会の「有益で楽しめる学術総会」というモットーはそのことを端的に表現しているといえよう。

IV. プログラム

プログラム委員長としてプログラムの策定にあたられた藍野学院短期大学の後山尚久教授は「……東洋医学の優秀性をアピールでき、しかも日本医学会の一員

であることを自覚した Up-date で、学術性に豊富な内容にしたい……」と述べられている。その言葉の通り非常に充実した盛りだくさんの特別演題の内容となっている(表1)。たとえば、13コマにもおよぶ「基礎漢方講座」、普段はなかなかお会いする機会も無い学会重鎮の先生方と間近に接することのできる「先達に学ぶセミナー」、漢方に於ける EBM (evidence based medicine) 構築を目指した「ラウンドテーブルディスカッション：劇的に効いた漢方の経験」、さらに医学生によるポスター発表など、多くの新機軸が採用された。当日、各演題には多くの聴衆が集まった。なかでも「基礎漢方講座」などでは会場に入りきれず、立ち見であふれるような状況すら見受けられた。このことは漢方に対する最近の関心の高まりを反映して、まさに求められていたプログラムであったことを表しているといえよう。

一般演題は250題で内容は多岐にわたる(表2)。本学術総会では演題分類の見直しを行い、新たに伝統医学的病態/診断/治療などの項目をもうけた。これは従来の診療科/臓器別の分類と切り離すことで、興味の対象を絞り、より深いディスカッションができるようにするのが目的であった。

V. 市民公開講座と藍野シンメディカル東西医療セミナー

総会プログラムに平行して市民公開講座と藍野シンメディカル東西医療セミナーが催された。市民公開講座は、文字通り一般の方々にも自由に参加していただく講演会で、講師の先生として、北里研究所東洋医学総合研究所所長の花輪壽彦先生、大阪市立大学大学院医学研究科皮膚病態学助教授の小林裕美先生、日本医科大学付属病院東洋医学科医局長の古賀実芳先生をお招きし、藍野病院内科の吉田麻美先生、そして本学の後山尚久先生にもご参加いただいて催された。テーマは「漢方でいきいき美しく」。漢方が未病をなおすことを目指し、その結果として美容にまでよい効果を示すという話に、参加した多くの一般の方々や藍野学院短期大学の学生は深く感銘を受けていた(図2)。

藍野シンメディカル東西医療セミナーは主に藍野の学生を対象とした教育セミナーである。今回は講師に西本願寺あそか診療所所長の佐々木恵雲先生をお招きし「医療における対話の重要性 ～医療と仏教の立場に立って～」と題してお話を伺った。佐々木先生は内

表 1 特別演題一覧

会頭講演	日本漢方の伝統を守る 藍野学院短期大学、藍野加齢医学研究所 大澤 仲昭
招待講演	サムシング・グレート ～遺伝子と漢方の研究から～ 筑波大学名誉教授 村上 和雄
特別講演 1	プロテオミクスと東洋医学 ～最先端医学からみる東洋医学の神髄～ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科先進治療科学専攻循環器・呼吸器病学講座 血管代謝病態解析学 丸山 征郎
特別講演 2	高齢者医療における漢方医学の意義 健康科学大学 折茂 肇
特別講演 3	COE プログラム ～東洋の知に立脚した個の医療の創生～ 千葉大学大学院医学研究院和漢診療学講座・先端和漢診療学寄付講座 寺澤 捷年
日本東洋医学会学術賞受賞講演	漢方臨床研究の展望 北里研究所東洋医学総合研究所 花輪 壽彦
教育講演 1	学術総会 (57) 基礎漢方講座 1～13
教育講演 2	日本漢方諸学派の流れ 安井医院 安井 廣迪
教育講演 3	明治維新の際、日本の医療体制に何がおこったか ——西洋医学選択の道のり—— 順天堂大学名誉教授、自治医科大学名誉教授 吉良 枝郎
先達に学ぶセミナー 1	夏ばての漢方治療 聖光園細野診療所 細野 八郎
先達に学ぶセミナー 2	口訣の応用 金匱会診療所 山田 光胤
特別シンポジウム	21 世紀の日本の東洋医学の進路を探る
シンポジウム 1	メタボリックシンドロームの治療における漢方の有用性
シンポジウム 2	病名治療でできる漢方、随証治療だからできる漢方
シンポジウム 3	古典に学ぶ：金匱要略
シンポジウム 4	漢方の EBM はどうあるべきか
シンポジウム 5	国際化に向けての漢方治療の最前線
ワークショップ 1	アトピー性皮膚炎の診療におけるステロイド療法と漢方療法の位置づけ
ワークショップ 2	病院医療における鍼灸 ——現代における鍼灸の役割を考える——
ワークショップ 3	生薬から漢方を考える
ラウンドテーブルディスカッション 1	劇的に効いた漢方の経験：ベストケースをエビデンスとするために 1
ラウンドテーブルディスカッション 2	劇的に効いた漢方の経験：ベストケースをエビデンスとするために 2
第 19 回伝統医学臨床セミナー	随証治療の神髄を探る

表 2 一般演題の内訳

内科疾患	39	伝統医学的病態	6
産科・婦人科疾患	16	伝統医学的診断	9
小児科疾患	4	伝統医学的治療	13
眼科・耳鼻科疾患	2	漢方処方・湯液	23
皮膚科疾患	12	生薬	4
泌尿器科疾患	4	薬理	8
感染症	8	医学史	12
悪性腫瘍	5	鍼灸	32
整形外科疾患	11	精神・心身医学・全人医療	18
歯科・口腔外科疾患	4	老年医学	5
その他	11	EBM	4
計			250

科の医師であると同時に真言宗の僧侶でもあり、その特別なお立場から得られた経験を平易な言葉でお話いただいた。著書である「いのちの処方箋」とともに、大変こころをうつ講演であった。

VI. 総会運営方法の改善

総会運営の面でもいくつか新しい試みがなされている。まず一つ目は、一般演題のオンライン登録の採用である。これには大学病院医療情報ネットワーク (UMIN; University Hospital Medical Information Network) を利用した。現在ではすでに多くの学会がオンライン登録を採用し、標準的方法となってきたが、東洋医学会では今回が初めての試みとなった。導入が遅れていた理由として、東洋医学独特の漢字の問題があったが、学会側で標準化した外字としてリストを作成して問題を回避した。

次に演題発表はすべてコンピューターを使用した発表形式にしたことである。これも他学会では一般的になりつつあることだが、従来からのスライドやオーバーヘッドプロジェクターなどはいっさい使用しないことにした。東洋医学会会員にはご高齢の開業医の先

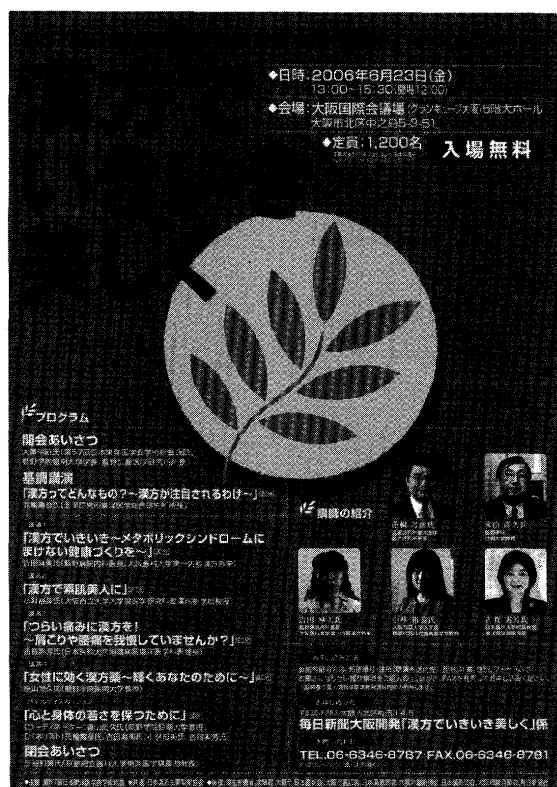


図2 市民公開講座のポスター

生も多く、なかなか敷居は高かったかもしれないが、主催者側で可能な限り援助を行い、大きな問題もなく円滑な運営ができた。

VII. 学生の参加

はじめに触れたように、藍野学院短期大学の学生が会場運営に参画したことは、今までの総会にはない新しい試みであった。参加した学生は約200名にのぼる。学会場に学会員でもなく学会運営業者の職員でもない人間がたくさんいるのは、あまりお目にかかれない状況ではあったが、学生たちの礼儀正しくまじめな対応について参加された方々の評価は高かった。実務面でも潤沢な人手によって、非常にスムーズな運営が可能となった。

学生たちは、少人数の班に分けられ、それぞれ時間ごとに役割を与えられた。配布される昼食以外は無償であったが、仕事のない時間には自由に講演を聴取したり、学会行事への参加することはできた。仕事の内容は会場進行係の補助、種々の受付業務、クロークなどであった。それに加えて会場案内も重要な業務であった。通常の総会では会場案内係など存在しない。しかし特に今回の会場であるグランキューブ大阪のよ

うに会場が複数階に分かれて道順のややこしいところでは、会場案内係の存在は大変ありがたいものである。しかも人数が十分にあるので各階、重要な場所にはすべて係の人間がいるのである。実際、来場された方々からはとても好評であった。

学生たちの様子を観察していて気づいたことだが、面白いことに、当初は何をしてよいかわからず言われるがままに仕事をしていた学生も、慣れてくると自分で仕事を見つけるようになってきたことである。相手の喜ぶことは何か？を考えればおのずとすべきことが見えてくる……ということであろうか。さらに興味深いことに、例えば車いすの人には持ち場を離れてでも押して行ってあげ、そして自分の抜けた穴には別の手のあいている学生が入る、などと組織的な動きが出てきたことである。もちろんこれは直接監督にあたられた教員の先生方のお力でもあるのだが、先生方のおられない場合でも、自然と組織化されるようになってきたのである。また現場ではいろいろな問題が持ち上がる。それに対してすぐその場で対処するか、あるいは自分では対処できない問題ならば、どこに持ってゆくか、瞬時に判断して行動しなければならない。短時間ではあったが、そういった問題解決についての経験もできたのではないかと考えている。

もちろん学会プログラムへの参加も得難い経験となったであろう。教育講演や一般演題での熱心な討論や、自分たちと同じような学生による研究発表などを通して、単に講演を聞いて知識を得るという受け身な勉強だけでなく、自ら参加するという勉強もあるのだということを知ってもらえたと思う(図3)。

VIII. おわりに

岡倉天心は『The Book of Tea』で「日本人は西洋を東洋に取り入れ、東洋を西洋に紹介するのに最も適した民族である」ことを示した。これは芸術の話であるが、医療においてもまたしかり、であろう。例えば漢方発祥の地である中国では、中医と西洋医は全く別の医療体系としてそれぞれ別々の医師が行っている。それに比べ日本では当然ながら基本は西洋医学であるが、同時に西洋医学の医師が東洋医学も行うことができるのである。したがって本質的な西洋医学と東洋医学の融合ができるとすれば、日本においてである可能性が高い。そして逆に西洋に対して東洋医学の優れている点を、単なる alternative medicine としてではなく、正確にその考え方で紹介することが今後の東



図3 学生参加の様子

洋医学の発展につながることであり、それもまたわれわれの使命であるといえよう。このように東洋医学の進むべき道が「東西医療の融合と発展」であるということを、今回の学術総会で明確に示すことができたと思う。そしてその重要な総会を本学が主催し成功したことはとても意義深く、また誇りに思う。

学会終了後、何人かの先生から藍野の学生について、礼儀正しく非常に好感を持て、大変良い企画であったと評価をいただいた。今回のような学生ボランティアはおそらく藍野学院であったからこそできたものであり、他の施設では困難であろう。そういう意味も含め

て、少なくとも東洋医学会関係の方々には、藍野学院とはどんな学校なのか知っていただき、良い印象を持ていただけたものと思う。逆に、上述した通り、学生教育という面においても得ることは多かった。今後もこういった機会を積極的に生かしていきたいと考えている。

最後にこの場を借りて、一致団結したご尽力を賜った日本東洋医学会関西支部の先生方はじめ、関わってくださった多くの方々のご協力に深く感謝の意を表します。